



## 中国公案小説の系譜 (其貳)

竹内 誠

チンギス・ハーンやフピライ・ハーンで知られる大モンゴル帝国、つまり元という王朝が13世紀、中国全土を支配する。そして従来の漢族の制度である高級官吏登用試験、科挙を廃止してしまう。そのため大臣を目指すような才能豊かなひとたちが、大量に思わぬほうに頭脳流出してしまう。毛色の変ったところでは、芝居の台本書きになる者もいた。そのおかげで、元の時代にすぐれた戯曲が数多く誕生する。戯曲といってピンとこない向きには、<sup>うた</sup>唱、せりふ、しぐさからなる4幕のオペラらしきものを想像してもらったらよいかもしいない。シェークスピア誕生のおよそ300年前のことである。ただ残念なのは、当時、戯曲や芝居などは正統な文学作品としては認められていなかったため、現存する資料が微々たるにすぎないことだ。元が減び、明代にはいって、ようやく元の戯曲を読むためのアンソロジーが編まれる。収録される脚本数が100篇であるので、「百種曲」あるいは「元曲選」と呼ばれる。このアンソロジーに収められている芝居を眺めてみると、興味深いことがわかる。のちに長編小説「三国演義」、「水滸伝」の題材となるものも含まれるが、それにもまして多いのが包拯ものである。包拯が登場する芝居は全体のほぼ一割を占め、群を抜いており、人気の根強さを物語る。ここで、包拯関連の芝居のひとつ「灰蘭記」を紹介しよう。金満家馬均卿の正妻は不倫相手の役人と謀って夫を毒殺。第二夫人の張海棠に罪を着せ、さらには遺産の相続者たる海棠の生んだ男の子を、自分の子と偽って主張し、はては近所の者までを買収し、そのように証言させる。しかし包拯に真相を暴かれ、張海棠の無罪が証明され、めでたし、めでたしとあいなる。正妻と張海棠のいずれが子供の実母かを判定するため、包拯がとった方法が一風変っている。石灰で欄(わく)をつくり、子供をその中に入れ、ふたりに両方から引っ張らせ、引っ張り出したほうが実母であると申し付ける。この芝居では、結局、

張海棠が子供を傷つけることになりやしないかと、引っ張らなかったので、彼女が真の母親だと判明することになっている。



《灰蘭記》挿絵

話は突然かわるが、先ごろ、田中真紀子外相更迭問題で世を挙げて大騒ぎとなったが、結果、当事者三人がそれぞれ辞職ということで決着を見た。それを評して「三方一両損」とメディアなどで報じられたことは記憶に新しい(この喩えは的外れと思うが、ここでは論じない)。「三方一両損」とは、テレビドラマでもお馴染み大岡越前守のエピソードに基づく。より正確に言えば、江戸時代人気を博した読み物「大岡政談」に由来する。その「大岡政談」に、「実母継母の子供争」の話があり、先に述べた「灰蘭記」の筋とそっくりであるけれども、偶然の一致というわけではない。「大岡政談」の題材が、包拯を含め中国の裁判物に基づいていることは、従来の研究によって、明らかにされているからだ。包拯様の御威光が、遠く離れた日本まで及んでいるのは大したものである。

ヨーロッパにまで版図を広げた元も、やがて朱元璋によって滅ぼされ、明という王朝に取って代わられてしまう。この時代、とりわけ顕著なのは、テクノロジーの長足の進歩であろう。出版業もその恩恵を大きく受け、書籍の出版量は飛躍的に伸びる。「三国演義」、「西遊記」、「水滸伝」、「金瓶梅」といった名だたる通俗小説は、この時期に相前後して出版されている。さて包拯であるが、それまで、語り物、芝居のキャラクターとして人気を博してきた。それも極めて断片的にというべきであろう。包拯の物語は、基本的には短編なのである。明代になると、そうした短編物語を小説化し、単行本として出版される。「龍圖公案」、「百家公案」などといった、「公案」を書名に掲げた短編小説集が続々と登場する。

(待 続)

たけのうち まこと(助教授・中国文学)